

教育課程編成・実施の方針

心理学研究科は、心理学の広範かつ高度な学識に基づき、臨床心理面接および心理アセスメントに関する実践的スキルを修得した心理臨床家の育成を目指す。こうした人材の育成およびディプロマ・ポリシーの総合的な達成を図る教育課程として、下記の科目（群）を体系的に編成している。

(1)コースワーク

- ①「発達心理学特論」など心理学専門科目
- ②「心理療法特論」、「認知行動療法特論」など心理療法関連科目
- ③「臨床心理査定演習」など心理アセスメント関連科目
- ④「臨床心理基礎実習」、「心理実践実習」、「臨床心理実習」など臨床心理面接の実習科目

(2)リサーチワーク

- ①「心理学研究法特論」、「心理統計法特論」など研究関連科目
- ②研究指導、修士論文作成指導の「研究指導演習」

コースワークは、「臨床心理基礎実習」（1年次）、「心理実践実習」（1・2年次）および「臨床心理実習」（2年次）の実りある学修へ向けて約20科目を体系的・組織的に配置している。実施にあたり、多くの科目（群）では、附属のカウンセリングセンターや学外臨床施設での実習と接続することで、ディスカッション等を通じた実習体験の多角的検討と理解の促進が可能となっている。

リサーチワークは、「心理学研究法特論」、「心理統計法特論」、「研究指導演習Ⅰ～Ⅳ」等の科目によって構成されている。研究指導に関する授業では、教育効果を鑑みて1・2年次合同で実施している。なお、本研究科の教育課程は、国家資格「公認心理師」受験取得および公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会の「臨床心理士」受験資格取得の条件を満たしている。

教育課程編成・実施の方針

本研究科は、看護実践の研究的検証を通して、実践の科学である看護学のさらなる発展に寄与できる次のような看護実践者、教育、研究者の育成を目指す。

- (1) 仏教精神に基づく人間観、死生観を深く理解し行動の指標にできる看護者
- (2) グローバルで多様な社会において学際的視点で柔軟に思考、行動できる看護者
- (3) 高度な専門知識、技術を有し、的確な判断力、研究資質を備えた看護実践者
- (4) チーム医療や地域連携ケアの中で、マネジメント機能を果たし得る看護者

これらの教育目標を達成するために、教育課程を2つの分野に区分し目指す人材育成に寄与する教育科目を設定した。第一は、医療施設を主とした臨床における療養看護は、研究ニーズの高い重要なフィールドであると認識し設定した「臨床療養看護学分野」である。第2は、加速する少子高齢社会を見据えた保健・医療・福祉施策が、地域、在宅をベースにした連携・協働的ケアに大きくシフトしている動向を背景に、そうした研究を支援する分野としての「地域療養看護学分野」である。両分野において新たな知見を得、研究遂行に必要な以下の科目を設置した。

(1) 共通科目

仏教精神の理解をはじめ、今日の社会や人々に関する多様で幅広い知識や現象の理解、思考や判断力の基礎となる7科目を編成する。

(2) 専門共通科目

高度化専門化する看護学に要求される思考力・判断力の基礎となる6項目で編成する。

(3) 専門科目

高度な専門的知識と卓越した技術を習得するために、より高い専門性を学ぶ「専門科目」を編成する。

① 臨床療養看護学分野

看護サービスマネジメント、看護実践など新たな看護援助の創造や開発など実践、研究、理論の課題を持つ研究を支援する「看護管理論・看護技術論・慢性看護論・小児看護論・精神看護論に関連する(演習を含む)」10科目で編成する。

② 地域療養看護学分野

社会変化による健康ニーズの多様性と、対象の持つ課題の多様性から、予防から生活の場までの課題を持つ研究を支援する。「国際地域看護活動論・老年看護・公衆衛生看護・女性健康論・在宅看護論(演習を含む)」の10科目で編成する。

③ 特別研究

社会のニーズに基づく研究課題を明確にし、創造的に解決する方法を探索する研究能力を身に着けるために、主、副指導教官の個別指導による的確で計画的な研究遂行及び修士論文の作成を目指す。

修了に必要な要件は、共通科目、専門科目計32単位以上を修得し、修士論文審査に合格することである。

修士論文の指導・評価及び審査の主な視点は次の点に置く。

- (1) 研究課題、研究枠組みの妥当性
- (2) 研究方法の妥当性
- (3) データ収集、分析の正確性、信頼性
- (4) プレゼンテーションの適切性
- (5) 研究における倫理的配慮、手続き
- (6) 研究の独創性、結果の有効性、今後の課題
- (7) 研究結果の看護学、看護実践への発展と貢献

教育課程編成・実施の方針

カリキュラム全体を通し、専門職としてふさわしい助産実践力を有し、使命感・倫理観を自覚した助産師を育成するために、本学科の教育目的・目標及びディプロマ・ポリシーの達成のため、以下の考えに基づきカリキュラムを編成、実施する。

【カリキュラム編成の考え方】

カリキュラムは「基礎助産学」を礎に、「助産診断・技術学」「国際・地域母子保健」「助産管理」「助産学実習」「助産学探究」の6つ分けて編成した

1. 基礎助産学

女性の性と生殖に焦点を当てて、医学的、産科学的知識と生命・人権に対する倫理観を身に付け、助産の基礎について学ぶ。また、妊娠・出産・育児だけでなく、女性の生涯を通じて、性と生殖に関する健康課題について、相談、教育、援助活動ができる能力を養う。

さらに、仏教精神に基づき、単に知識、技能を習得させるのではなく、専門職として学生が自ら真実の人間としての生き方を求め、自己を問い、自己を確立できる態度を養う。

2. 助産診断・技術学

看護基礎過程で履修した科学的問題解決技法を用いて、助産の視点より妊産褥婦及び胎児・新生児の健康に関する情報を収集して診断し、助産過程の展開ができる能力を養う。また妊婦の主体性を尊重した出産を支援する能力を養うと共に、急変時の母児の対応についても学ぶ。

3. 国際・地域母子保健

核家族化や女性の社会進出が進む中、安心して子どもを産み育てるために、地域で子育て支援サービスや母子保健サービスなどの社会資源の活用や調整を行える能力を養う。そのために関係職種・関係機関との連携・調整、多職者と連携・協働の重要性について学ぶ。さらに国際化を視野に、途上国における母子保健の現状と国際協力についても学ぶ。

4. 助産管理

産科病棟や助産所の運営・管理を安全に行うための基本を学ぶ。さらに周産期における医療安全の確保（緊急搬送体制）と医療事故への対応についても学ぶ。

5. 臨地実習（助産実習・地域実習）

妊娠期から産褥・新生児期までの診断・判断力を高め、妊娠・出産・産褥・新生児期が自然で安全に経過できるよう、自然機能を助長・支援ができる専門的技術を養う。

また、多角的な実習施設での臨地実習を行い、実践的な思考能力を養う。

6. 助産学探究

ケア向上のための探究心と、研究過程を通して、科学的な思考や論理的表現方法を養う。

これらのカリキュラムを通して、次代に求められる助産実践力のある助産師を育成することとした。